主体的に家庭学習に取り組む子を育てる
計算ドリル「がんばり表」の活用

岐阜県教諭　市川　友博

一　ある授業での子どもの姿から

「先生、宿題出して。」
「今日のプリントを、もう一枚下さい。」
「家でやってくるから、丸をうってね。」

授業の終わりに、こんな言葉を投げかける子どもが増えてきた。

ことの始まりは、五月上旬、四年生の授業が終わったときのこと。職員室に戻りかけた私に、「今日の授業でやったところは、ドリルのどこをやればいいの。」と、ある女の子が話しかけてきた。その理由を聞いてみると、「今日の授業でできたところをもう一回、家でやってみたいから。」と笑顔で答えた。

本校では昨年度から、自ら学ぶ意欲を高めること、基礎基本の確実な定着を図ることを目標として、算数教科で少人数指導を行っている。特に、児童の実態や指導内容から判断して、指導形態を多様に考え実施している。

この時の単元では、子どもたちの習熟度、学習進度などに応じて設定した補充・標準・発展の3つのコースを、子どもたちがレディネステストの結果などから自己判断で選択して学習を進めていく指導形態で行っていた。この女の子は、私が担当する補充コースにいた。このできごとが、宿題への取り組ませかたについて考えるきっかけになった。

二　全校的な立場から算数の宿題を考える

私は、少人数指導担当、学級担任ではない算数の専科として、全校の算数の学習に関わっている。授業での学習の進め方や指導方法のポイントなどを学級担任と確認し、基礎基本の確実な定着を図っている。さらに、家庭学習のあり方として、より効果的な「宿題」についても学級担任と考え、働きかけの工夫を行っている。

以降、学級担任との話し合いで明らかになっていった「宿題」に対する取り組みや今後取り組んでいきたいと考えていることについて述べていきたい。

三　主体的に「宿題」に向かう

「宿題」「家庭学習」というと、教師が子どもに課すものというイメージがあり、「宿題です」というと、「えーっ」という返事が返ってくる様子が思い浮かぶ。しかし、前述した四年生の女の子は、宿題をやらされるものとしてではなく、「自分が挑戦するもの」「授業の確かめができるもの」としてとらえている。

まさに、主体的に学習を進める子の姿であると感じた。そして、この姿勢や意欲は確実に「生きる力」につながると考える。そこで、主体的に宿題に向かうことができる子を育てていきたいと考えた。

四　計算ドリル「がんばり表」の活用

ある文献に、発達段階から見た四年生の特徴のひとつに「授業だけでは学習内容の定着が難しくなる」とあった。指導内容をみてみると、三年生以降は、かけ算やわり算の単元で形式的な処理ができることが求められている。しかし、形式的な処理の理解や、処理の速さは個人差が大きくなり、単位時間の中で確実に全員の子に身につけさせることは簡単なことではない。当然、子ども故に忘れてしまうことも多くある。

そこで、宿題という形で、その日のうちに家庭学習をすることで、既習事項のより確実な定着を図っている。

本校で宿題として出されるものは、教科書の問題、教師が作成したプリント問題、そして副教材として購入している計算ドリルである。教科書の問題はできるだけ授業中に行うようにしているので、宿題として出されているのは計算ドリルが多い。

計算ドリルに取り組むときには、次のような約束を決め、取り組んでいる。

・計算ドリルは「くり返し」するもの
・自分で答え合わせをして、間違えたところはもう一度やってみる。
・計算ドリル「がんばり表」に取り組んだ日にちを記入し、ノートと一緒に「がんばり表」も提出する。

毎日といってよいほど取り組みが可能な計算ドリルだからこそ、子どもが主体的に取り組めるようにする方法の一つとして、計算ドリルがんばり表（以降「がんばり表」とする）を活用している。

このがんばり表は取り組んだ結果が記録と

効果倍増!
わたしの教材活用術

日々の授業で使う教材や教具。隣のクラスや隣の学校のあの先生は、一体どんな使い方をしているのでしょうか？このコーナーでは、気になる教材活用術を紹介します。

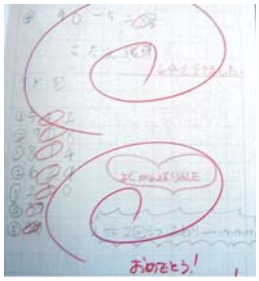
して残り、自己評価、教師評価、さらには相互評価もできるものである。基礎基本の確実な定着を図る目的に加え、子どもたちが意欲をもって宿題に取り組めることも願い、このがんばり表を有効に活用しようと考えた。

五　発達段階に応じたがんばり表の活用

がんばり表の活用の仕方は学年の発達段階によって多少異なると考えている。その活用例を低・中・高学年に分けて以下に示す。

（一）低学年の発達段階に応じた活用

低学年は、家庭学習の習慣が定着していないことが多いため、保護者の理解と協力が必要不可欠である。しかし、つきっきりで一緒に取り組む家庭もあれば、時間がなくなかなか見ていられない家庭もある。そこで、過程を見ていても見ていなくても、取り組んだノートを見てもらい、可能な時に保護者に一筆コメントをお願いしている。保護者の言葉が子どもの満足感になり、新しい取り組みに向かう意欲になっていることは、がんばり表とノートを提出する時の子どもの表情からも伝わってくる。



（二）中学年の発達段階に応じた活用

自分で取り組み自分で評価することができるようになる中学年では、計算を正確にできることがこだわりとなってくる。

がんばり表に印を押すだけでなく、全問正解のときは、この表に合格シールを貼ったり、全部できたら大きなシールを貼ったりしている。たとえ四年生でも、合格シールをもらうと心から喜び、さらに次への挑戦を言葉にして教師に伝えてくれる。

（三）高学年の発達段階に応じた活用

学力の差、家庭学習への取り組みに対する個人差が大きくなる高学年では、自己評価や教師の評価に加えて、相互評価の場の位置付けがポイントになると考えている。

例えば、グループ単位で個々の取り組み目標を明確にして、がんばり表をもとにお互いに努力を讃えたり、励まし合ったりする場を位置付けることで、個の取り組みがより強く、より確かなものになっていくと考える。

（四）がんばり表活用の成果と課題

子どもたちにがんばり表を使用することについての感想を聞いてみた。

> 去年は使っていなかったから、簡単なページは何回もやるけど、難しいページや苦手なところのページは一回で終わらせてしまっていた。でも、今年は、この表があるからどのページも三回やるようになったし、自分のための勉強になるから役だっているよ。（五年女子）

> たくさんできると「やった！」て感じでうれしいし、先生がシールを貼ってくれるからもっとがんばれるよ。（三年男子）

子どもたちの感想や取り組みの様子から、子どもたちにとって、このがんばり表には次のようなよさがあることが明らかになった。

【達成感や満足感が実感できる】

・「今日は○ます記入できた。」
・「一週間で○ます記入できた。」
（短期・長期の達成感や満足感）

【目標を設定することができる】

・「来週までに全部2回やりきるよ。」
・「先週は一週間で五つだったから、今週は六つ記入できるようにするぞ。」
（目標の明確化・自己への挑戦）

担任が、単にがんばり表を手渡すだけでなく、子どもに対する具体的な願いをもち、その願う姿に迫るための活用の仕方を工夫することで子どもたちが宿題に主体的に取り組むことができるということが明らかになった。

当然、大前提として、子どもたちが「できた」「わかった」という学習の喜びを味わえるような授業を日々行っていかなければならない。これなくして宿題に向かう意欲は生まれない。このことを学級担任とともに大切にし、今後も一人でも多くの子が授業でも家庭学習でも、自ら学ぶ意欲を持ち続けることができるように取り組んでいきたい。